



耕作放棄地とサポーター

佐賀県多久市立東原産舎中央校九年

中尾 文香

「こんな風景だったっけ？」

ふと目を向けた場所は、私が毎日通学路として通っている道にある田んぼだった。

その田んぼには稲ではなく、私の身長を優に超えるくらいの背の高い雑草がたくさん生えていた。しかし少し先に行ってみると、青々ときれいに手入れされている稲が元気に育っていた。なんでこんなにも違いがあるのだろうか。そう思った私は家に帰って母に聞いてみた。

「あそこは耕作放棄地っていうとよ。たしか、じいちゃんの持っている土地にもそういう場所があったと思うけん、今度会ったときに聞いてみたら？」

そのことを聞いた私は、お盆にみんなで集まった時に、祖父に尋ねてみることにした。

「ねえじいちゃん、家の前にあつた田んぼはなんで作らんことなつたど？」すると祖父からは次の言葉が返ってきた。

「それはね、あの田んぼは狭くて機械を使って作業することができんよ。うになつてしまつたけんよ。若い時は手植えするのでも何ということもなかつたばつてん、さすがに八十才という年齢ば考えたら、全部人の手でするには限界がある。そいけん、やむを得ず作らない決断ばしたとたい。じいちゃんもいつまでできるか分からんしね。」

その話を聞いた時、少し切ない気持ちになつた。

祖父が農業を始めてから今年で六十年が過ぎた。毎年、春には種をまき、苗を育て、田植えをする。夏には消毒や田の草取りをして、苗を大きく育てる。田んぼの水は枯れていないか、十分にあるか、朝に夕に田

まわりをすることも大切な仕事だ。そしてようやく秋には収穫。そのサイクルで何十年も米作りをやつてきた。しかし祖父も年齢には勝てないと思つたのだろう。機械が使えないところでお米を作り続けるのは厳しいと判断した上での苦渋の決断が耕作放棄なのだ。通学路にある田んぼも理由があつての耕作放棄なのであろう。手入れをしなくなるといふことは、私が見たあの高い雑草が際限なく伸びていってしまうことになる。そのまま放つておくと近くにある他の田んぼにも影響を与えてしまうだろう。

もしこのままこの問題を放つておいたら、間違いなく耕作放棄地は増え続け、それにつれ農業に携わる人の数も減少し、農作物すべてを輸入に頼つてしまわなければならなくなる。どうにかしてその状況を回避していきたい。どうすればいいかな、と私は一人で悶々と考えた。

この状況を解決するには、みんながもつと自分が毎日食べているお米や野菜に興味や関心を持ち、佐賀県産を進んで買つて生産者を支えていくことが大切なことではないだろうか。佐賀県で作られた物を佐賀県の人喜んで買う。という構図が今以上にしっかりとできていけば、現在農業をしている人はいうまでもなく新規で就農する人が増えるかもしれない。私たちができることは、サポーターになることだ。サポーターは選手を応援することで元氣ややる氣を与えることができる心強い存在だ。

今の私には耕作放棄地が増えないようにするために直接農業に関わることはできないが、祖父や祖母の農作業の手伝いをしたり、その様子を友達に伝え農家を身近に感じたりしてもらふこと、買い物をする時は積極的に佐賀県産の野菜や果物の購入をすること、知り合いに県内産の農作物を進んで買うように勧め、佐賀県の農家のサポーターになつてもらふように声をかけることはできる。自分ができることを少しずつ増やしなから、農家を元氣づけていきたいと思う。私が成人になる三年後には、今見ている青々とした田んぼが耕作放棄地にならないようにと願わずにはいられない。